

要旨

湊照宏（立教大学経済学部）

本報告の目的は、日本植民地経済史の視点から、古田和子・太田淳編『アジア経済史』（上下、岩波書店、2024-25年、以下本書）に対してコメントすることにある。アジア経済史に関するテキストとしては、東アジアを主対象とした堀和生・木越義則『東アジア経済史』（日本評論社、2020年）が既に刊行され、利用されている。これに対して、本書の特徴の一つは、各地域（東アジア、東南アジア、南アジア）の経済史についてバランス良く説明していることにある。この特徴により、本書は各地域の特殊性を相対化したうえで地域間の関係性を把握し得る構成になっている。

本報告では、この特徴に着目し、日本帝国経済圏が拡大して崩壊した東アジアを参照軸にして、東南アジアおよび南アジアとの共通性や相違性に関する論点についてコメントする。具体的には、小農経済、欧米勢力がもたらした「衝撃」、金本位制、土地改革などについて言及する。言い換えれば、本書を利用して東アジア経済史に対する理解を深めることに意義を求めた報告内容となる。